第36回県小学生読書感想文コンクール

各学年の最優秀賞

主催　福井新聞社
後援　福井県、県教育委員会、県小学校教育研究会図書館部会
協賛　県教科書供給所、あかね書房、岩崎書店、偕成社、金の星社、小峰書店、文研出版、ポプラ社
特別協賛　三谷市民文化振興財団

福井新聞社主催の第36回県小学生読書感想文コンクールは９月に審査が行われ、過去最高の応募総数2982点の中から知事賞などの最優秀賞と優秀賞、入選合わせて48点が選ばれた。各学年の最優秀賞作品を紙上で紹介する。表彰式は16日（土）午前11時から、福井新聞社・風の森ホールで行う。

知事賞

「あきらめないこと それが冒険だ」を読んで

図書名「あきらめないこと それが冒険だ」
福井市・岡保小６年　鈴木　利拓

ピカッ、ゴロゴロゴローッ

ぼくは、あんなに恐ろしい思いをしたのは生まれて初めてだった。生きた心地がしなかった。辺りは真っ暗。自分の前を歩く父が、懐中電灯で足元をぼんやり照らしていたけど他には何も見えなかった。少し後ろを歩いているはずの母の姿も見えなかった。一歩先が道なのか、がけなのか、全く見当がつかない。降りつける雨の中、すぐ近くでいなずまが光ったかと思うと、ものすごい音で雷が鳴る。

「富士山ほど高い山になると、雷は上から下に落ちてくるんじゃなくて、ま横にはしるんだよ。ついこの間も、その雷にやられて人が亡くなっている。気をつけて下さいね。」

五合目の駐車場のおじさんが言っていたことがぼくの頭に浮かんだ。もう一歩も前へ進めなかった。ぼくたちは、少し前に通りすぎた山小屋へと引き返した。山をあまくみていた。自然のこわさを全く分かっていなかった。

ぼくは、去年、父や母と富士山の頂上に登った。これは、その時の体験だ。そして、一年後、ぼくは、一冊の本を見つけた。

「あきらめないこと それが冒険だ」

という題の本の表紙には、冬山に登る登山家野口健さんの写真がのっていた。野口さんの顔は、日の光をあびて輝いていた。ああ、そうだ。山小屋に泊めてもらって、ぼくが見た朝日も、とてもきれいでまぶしかった。ぼくは、死ぬほど恐かったけど、同時に美しかった富士山を思い出した。

野口さんは、小さい頃、自分を落ちこぼれと思って悩んでいた。しかし、山登りをすることによって、自分の進むべき道を見い出した。そして、世界七大陸最高峰登頂に、最年少で成功する。岩や氷や雪しかない「死」の場所を進んでいくためには、ものすごい勇気と冷静さが必要なことは、ぼくにも想像できる。でも、ぼくがこの本で一番印象に残ったのは、これほどの記録を成し遂げた野口さんが、清掃登山に挑戦するところだ。

ぼくは、まず、ヒマラヤやエベレストなどに、日本の登山家が捨てたゴミが多いということに驚いた。そして、富士山が外国の登山家から「ゴミの山」と思われていることにも。ぼくが富士山に登った時、ゴミはあったっけ。全然覚えていない。ゴミのことになんて目がいかなかった。途中何か所かあったトイレも、それが山の環境を悪くするものだという意識は全くもたなかった。そういえば、以前、屋久島に行った時も、ゴミやトイレのことがすごく問題になっていた。自然の美しさを見にくる人が、自然をけがしているのだ。ぼくも含めて。

野口さんによれば、エベレストのゴミの量は、何年も前の古いゴミから最近捨てられたゴミまで半端じゃない量だという。そして、これらのゴミを拾うのは、平地でのゴミ拾いと違って、骨身をけずっての命がけの活動なのだそうだ。野口さんは、富士山清掃登山と青木ヶ原樹海ゴミゼロ作戦も始める。水を作る山を汚せば川も汚れる。野口さんは、現実を知ればまりに絵がリアルすぎる。目をとじてしまいたくなるくらいこわい。この本でヒロシマのせんそうの話をしてくれるうねさんというおばあさんも、今は元気でかわいいおばあちゃんだけど、どんなにつらい思いをしたのだろうと思った。

そして、今度はうねさんの話をじっくり聞いてみた。うねさんは、九十一才。えっ?!、びっくり時は、わたしだけせんそうの事が分からず、お母さんだけがないていました。でも、うねさんのお話を聞いて、わたしも分かる様になりました。

うねさんが、へいき工場のたぐ所で、ほぼさんをしていた時、ウランという原ばくがピカッと落ちました。体がふきとばされてもひっ死に外へ出て、子どもたちをさがしまわった事。外は地ごくの様で、やけこげてしまった人たちに「水、水を下さい」と手をつかまれ、「かんにんしてよ」と手を合わせた事。

うねさんは、ずっとわすれられず、原ばくでなくなった人たちに、五十年以上も、あのたきの水をけん水していたのです……。

うねさんに飲ませてもらった、こいの山のたきの水は、とてもつめたくて、きらきらしていました。原ばくにあってしまった人たちが、あのたきもたちに、誰が悪いかを決めるのではなく、自分に何ができるかを考えてほしいとうったえかけたのです。ぼくはギクリとしました。きっと授業を受けていた子たちもそうだったと思います。多くの人が、成長して元気に走る未来の写真を見ると、かわいいとか、こんな犬が欲しいとか思います。しかし、たいていの人は、右目がだれ、足がなくて骨が見えている子犬を見て、こんな犬が欲しいとは思いません。

県教育委員会賞

「未来」がくれたもの

図書名「しあわせのバトンタッチ」
福井市・東郷小５年　野坂　典之

その後今西さんは、学校などをまわって命についての出前授業をするときに、未来を運れていくことを考えます。でも、そんな出前授業の内容は、ぼくにとってはびっくりすることの連続でした。

まず、初めて未来を運れていった、小学三年生の出前授業でのことです。捨てられた犬が捕まえられ、やがては殺処分される話を聞いた子どもはみんな、かわいそうだとか、飼い主が悪いとか言います。未来の話を聞くと、そんなことをした人間の足も切ってやれと言いました。そしてそんな意見に、ぼくも大賛成でした。ところが今西さんは、「かわいそう」という言葉が嫌いだそうです。そしてさらに、子どもたちに、誰が悪いかを決めるのではなく、自分に何ができるかを考えてほしいとうったえかけたのです。ぼくはギクリとしました。きっと授業を受けていた子たちもそうだったと思います。多くの人が、成長して元気に走る未来の写真を見ると、かわいいとか、こんな犬が欲しいとか思いません。しかし、たいていの人は、右目がだれ、足がなくて骨が見えている子犬を見て、こんな犬が欲しいとは思いません。

ぼくは、この本を読み始めてすぐに、すごく腹が立ってきました。犬の未来は、赤ちゃんのときに、とてもひどい目にあわされたのです。生まれたばかりの子犬の、足や指を切り取ったり、目を傷つけたりするなんて、許せません。また、はじめに未来を助けようとした少年の母親は、右足首から下全部と左足の指がなく、目から流れた膿にウジ虫がわいた未来を見て、気持ち悪い汚い野良犬と言って怒り、少年に捨ててこさせたのです。

ぼくは、未来にひどいことをした人間や、救おうとした少年を怒った母親や、捨てられた身寄りのない犬の殺処分のことや、いろんなものに腹が立って胸がむかむかしてきました。だから、未来が殺処分になるギリギリのところで山口麻里子さんによって救い出され、その三ヵ月後に筆者の今西さんによって引き取られたことがわかって、未来といっしょにぼくも救われたような気がしました。

三谷市民文化振興財団賞

おねえちゃんへ

図書名「いぬうえくんがわすれたこと」
福井市・福井大附属小２年　小林　萌桃子

わたしは、「いぬうえくんがわすれたこと」を、読んだよ。とう場人ぶつは、かってだけど、しっかりもののいぬうえくんと、わすれっぽいけど、やさしいくまざわくんだよ。

いぬうえくんは、おねえちゃんみたいにえらそうなんだ。いつも、くまざわくんがごはんをつくるかかりなんだけど、いぬうえくんは、「スープはぬるめのほうがいい。」とか、かんそうを言うかかりと言うより、ダメ出しのかかりなんだ。わたしもときどき、おねえちゃんってえらそうでイヤだなぁー。って思うから、くまざわくんもいぬうえくんが、イヤなときもあるだろうな。

くまざわくんもおねえちゃんに、にているよ。くまざわくんは、いぬうえくんとのやくそくや、明日することを、わすれてしまうんだよ。でも、わすれたことをおしえてくれるいぬうえくんがいるから、わすれてたことに気がついて、楽しい話になるみたいだね。やっぱり、わたしとおねえちゃんににているね。わたしが、いぬうえくんのときもあるし、くまざわくんのときもあるね。ママに、

「二人とも、けんかするんやでほなれてね。」っていつもおこられても、すぐにくっついてわらってしまうね。

さいしょ、この本を読んだとき、くまざわくんは、なんでえらそうないぬうえくんといっしょにくらしているのか、わからなかったけど、「にじをみるのは、ともだちといっしょのほうがいい。」といぬうえくんがつぶやいてくれたとき、わかったよ。くまざわくんもにじをみて、ともだちがいてよかったって思ったから、いっしょにいるんだってわかったよ。やっぱりわたしとおねえちゃんにそっくり。いっしょにいると、けんかばっかりするけどおねえちゃんのかえりがおそいと、しんぱいしてさみしいし、楽しいことは、いっしょのほうがもっと楽しい。わすれていることも、おしえあえるし、おこられても、またすぐに、わらっちゃう。

わたしは、おともだちがだいすきです。おともだちとあそぶと、とってもたのしいきもちになります。あおいろで、ぐるぐるもようのうきわもしています。

だから、キツネのおともだちのたのしいおはなしかなあとおもってよみました。でも、ほんとうは、ちょっぴりかなしいおはなしでした。キツネはおともだちがいなかったのです。それで、「ともだちって、いいな」と、わらいました。

つぎに、キツネはオオカミによばれました。オオカミはキツネに、「トランプのあいてをしろ。」といいました。オオカミはこわいし、キツネをたべてしまうかもしれないぞ。だいじょうぶかなあ、としんぱいになりました。

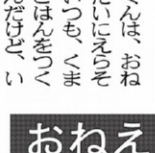
トランプは、オオカミが三かいかって、キツネが一かいかちました。オオカミもキツネも、とてもたのしそうでした。

でも、オオカミがおこりだしました。「ともだちから、かねをとるのか。」といって、きばをかちかちならしました。キツネは、たべられてしまうかもしれない、とおもいました。

だけど、オオカミは、おかねのかわりに、いちばんだいじなたからものの、ミニカーをくれました。オオカミは、ほんとうは、やさしいんだとおもいました。そして、キツネとオオカミが、ほんとうのおともだちになれたので、わたしもうれしくなりました。

「ともだちや」をよんで、やっぱり、おともだちっていいなあ、とおもいました。わたしも、一ねんせいになってすぐは、おともだちができるかなあ、としんぱいでした。わたしの一ねん四くみには、いろんな子がいます。げんきな子も、しずかな子も、おもしろい子も、ちょっといじわるな子もいます。いじわるな子は、いやなことをいってくるので、ちょっぴりにがてです。でも、オオカミも、はじめはこわいかとおもったけど、ほんとうは、やさしかったので、にがて な子とも、なかよくなれたらいいな、とおもいました。

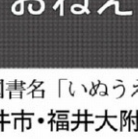
わたしは、四くみぜんいんでする、はないちもんめがだいすきです。なつやすみがおわったら、またみんなでやりたいなあとおもいます。



福井新聞社賞

ともだちって、いいな

図書名「ともだちや」
福井市・明新小１年　小倉　侑実



県小学校図書館部会賞

「ヒロシマのいのちの水」を読んで

図書名「ヒロシマのいのちの水」
福井市・福井大附属小４年　荒木　魁人

ぼくのひいおじいちゃんは、せんそうで死んでしまった。

春休みに沖なわ旅行に行った時、まず最初にひめゆりのとうにお参りに行った。そこで聞いたせんそうの話や生き残った人が書いた日記のようなものをお母さんに読んでもらって、せんそうの本当のこわさを知ったので、ヒロシマに落ちた原ばくの話も読んでみようと思った。

ぼくは、まず文を読まずに絵を何回も見た。あまりに絵がリアルすぎる。目をとじてしまいたくなるくらいこわい。この本でヒロシマのせんそうの話をしてくれるうねさんというおばあさんも、今は元気でかわいいおばあちゃんだけど、どんなにつらい思いをしたのだろうと思った。

そして、今度はうねさんの話をじっくり聞いてみた。うねさんは、九十一才。えっ?!、びっくりもすごい。どうしてこんなに長い間できたのだろう。

うねさんはほ母さんだったんだな。だからぼくたち小学生にもわかりやすく説明してくれるのだな。ヒロシマのせんそうは、うねさんがひじ山の下の工場でほ母さんをしていた時にあった事が分かるはずが、真っ暗になり家もなく、子供も外にとばされてしまった。子供が足りない!!。うねさんは探すのに必死だっただろう。その時、「水」「水」と手をギュとつかまれたけど、水をあげれず、助けてあげられなかったことがずっとうねさんの心をいためていたのだな。

ぼくも、この本を見ただけでも、黒こげになった人が助けてと言っているのがわかる。

せんそうが終わってからだけど、たきの水を見つけた時は、うれしさとあの時見つけていたらという気持ちだったと思う。でも、ホッとした気持ちが大きいと思った。だから、今までずーっといれいひにお水をとどけることをしているのだと思った。うねさんのとどけている水は、せんそうで死んでしまった人みんなの喜んでいると思うよ。

「ありがとう。」「いつもありがとう。」と言っているよ。

ぼくは、今年もおはか参りに行った。今年はいつもよりたくさんの水をおはかの上からかけてあげたよ。よろこんでいるみたいです。

―さい後に、うねさんとわたしのやくそく―

かくという物がなくなっても、せんそうが終わったとしても、人びとどうしが平和でなかったら、平和とは言えません。

自分を生んでくれた、お父さんに感しゃをし、お母さんに感しゃをし、これからの平和をつくっていって下さい。そして、この地球をえがおでいっぱいにして下さいね……。

わたしは、うねさんとした、このやくそくをわすれずに、平和を守っていきたいです。

そして、おはかの前でお参りをした。二度とせんそうがおこりませんようにと。

ぼくたちの年代は、せんそうの事をほとんど知らないと思うけど、大切な命を一しゅんでうばったせんそうの事を知っておくべきだと思った。ひいおばあちゃんは大変だったことと、とってもつらい思いをしていたということがよく分かった。

二度とせんそうがおきませんように。

県教科書供給所賞

うねさんとわたしのやくそく

図書名「ヒロシマのいのちの水」
福井市・福井大附属小３年　加賀谷　春馨

八月六日、金曜日。わたしは家族と、はじめて広島へ行きました。この本を読んで、わたしとお兄ちゃん、お母さんまでもが、とても感動したからです。それから、もっと感動した事があります。平和きねん式てんの後、ふん水の前で、この本の主人公の、うねとしえさんと会う事ができたのです。そしてさい後に、あるやくそくをしました。

はじめに、うねさんは、こいの山にあるたきへつれて行ってくれて、原ばくの時の悲しいお話をしてくれました。式てんの時は、わたしだけせんそうの事が分からず、お母さんだけがないていました。でも、うねさんのお話を聞いて、わたしも分かる様になりました。

うねさんが、へいき工場のたぐ所で、ほぼさんをしていた時、ウランという原ばくがピカッと落ちました。体がふきとばされてもひっ死に外へ出て、子どもたちをさがしまわった事。外は地ごくの様で、やけこげてしまった人たちに「水、水を下さい」と手をつかまれ、「かんにんしてよ」と手を合わせた事。

うねさんは、ずっとわすれられず、原ばくでなくなった人たちに、五十年以上も、あのたきの水をけん水していたのです……。

うねさんに飲ませてもらった、こいの山のたきの水は、とてもつめたくて、きらきらしていました。原ばくにあってしまった人たちが、あのたきの水を見つけられていたら、どんなにうれしかったかなあ……。

また、しりょう館で見た、お兄ちゃんと同じ、中学一年生の男の子の、黒いべん当箱。わたしは、おなかがすいたらいつでも食べられるのに、あの男の子は、とても楽しみにしていたおべん当を食べる事ができず、大切そうにだきしめたまま、死んでしまったのです。

わたしたち家族は、こどものいれいひに、「今度こそ、せんそうのない時代に生まれてきて、このヒロシマで、命の続きをせいいっぱいして下さい」と、おいのりをし、たきでくんだきらきらのお水をけん水しました。

その後、たきのかんのんのお寺で、うねさんに、教えてもらった言葉。

「ゆるすという心を持って下さいね……。」

それを聞いて、わたしのお母さんが、一番反せいしてました。お母さんは、わたしとお兄ちゃんには、ケンカをするたびに、

「明日になったらすかっとわすれて、なかよくね」

と言うのに、自分のことになると、ずっとおこっているからです。お母さんも、うねさんに会ってから、いっぱい勉強できたみたいです。

―さい後に、うねさんとわたしのやくそく―

かくという物がなくなっても、せんそうが終わったとしても、人びとどうしが平和でなかったら、平和とは言えません。

自分を生んでくれた、お父さんに感しゃをし、お母さんに感しゃをし、これからの平和をつくっていって下さい。そして、この地球をえがおでいっぱいにして下さいね……。

わたしは、うねさんとした、このやくそくをわすれずに、平和を守っていきたいです。

福井新聞

© 福井新聞社　無断複製・転載を禁じます